ノート

エコープラナー法による心筋の拡散係数の計測

岡山悟志¹, 笘谷宏樹³, 南 征宏³, 島 克嘉³, 尾上健児¹, 竹本康宏¹, 大森佐和子², 岩間 -², 浦元宏樹², 小林良幸², 渡邊眞言², 中西土郎³, 久保田 靖³, 上村史朗¹, 斎藤能彦¹

1奈良県立医科大学第1内科 2平井病院循環器内科 3同放射線科

はじめに

拡散強調画像は,組織内の水分子の拡散能を 画像化する撮像法である.この撮像法により得 られた,水分子の拡散の強さと異方性について の情報は組織性状の評価を可能にする.現在, 拡散強調画像は,中枢神経領域では脳梗塞の急 性期診断や神経線維の走行の評価に,躯幹部領 域では悪性腫瘍のスクリーニングや悪性度評価 に広く用いられている¹⁾.しかしながら,これ まで,心臓領域では,心拍動と呼吸に伴う動き のためアーチファクトが多くほとんど用いられ なかった.

近年,撮像技術の著しい進歩により心臓領域 での拡散強調画像が可能になりつつある. 1994年にEdelman RR ら²⁾は,呼吸停止下で 心電図同期のstimulated-echo echo-planar imaging (STE-EPI) 法を用いてヒトの心臓拡散強 調画像を撮像できることを初めて報告した.報 告では,STE-EPI 法を用いた心臓拡散強調画 像の問題点として,左室自由壁,特に後側壁の 正常壁運動に伴う信号強度の低下が指摘され た.しかしながら,その後,Reese TG ら^{3),4)} と Tseng WY ら^{5)~7)}は STE-EPI 法を改良し てこの問題点を克服し,2006年に Wu MT ら⁸⁾が同手法を用いて急性心筋梗塞後の心筋線 維のリモデリングについて報告した.

一方,今回,我々は,近年可能となった呼吸 と心電図同期の single-shot echo-planar imaging 法を用いて心臓拡散強調画像を撮像するこ とを試み,至適撮像条件について検討した.さ らに,健常ボランティアを対象に心臓拡散強調 画像を撮像し,心筋組織の ADC (apparent diffusion coefficient)を測定し,組織性状の評価 を試みた.

対象と方法

対象は、健常ボランティア 10 例(男性,30 ±3 歳)である.撮像に用いた装置はシーメン ス社製 1.5 テスラ MRI Avanto であり、胸部 に 8 チャンネルの phased array coil を用い た.各検討項目共通の撮像条件は、single-shot echo-planar imaging 法(パラレルイメージン グ; GRAPPA (generalized autocalibrating partially parallel acquisitions) · Factor 2,脂肪抑 制法; Chess (chemical shift selective) 法, MPG (motion probing gradient); 3 軸,

 $\neq - \nabla - k$ cardiac magnetic resonance imaging, diffusion-weighted imaging, single-shot echo-planar imaging, apparent diffusion coefficient (ADC)

FOV; 折り返し現象がない最小のものに設 定, マトリックス; 256×256 (interpolation 使 用), 加算回数; 3回, TE; 72 ms, TR; 3,000 ms 以上(1心拍に1回の割合で心電図同期し たが, 呼吸同期を併用した際にはデータ収集を 行わない心拍が存在するため, 平均3,000 ms 以上の間隔でデータが収集された.), スライス 厚; 8 mm, スライス間隙; 2 mm であり, 1 回の撮像により異なる二つの b 値の左室短軸 像 3 断面の拡散強調画像を取得した.

はじめに、呼吸同期の有無について検討した. Retrospective ECG gating 法を併用した steadystate coherent gradient echo 法を用いて呼気時 のシネ画像を撮像し、心臓ができる限り静止し ている心時相を決定した.この心時相を trigger delay として心電図と同期させ、b 値を 50 s/mm² に設定し、2D-PACE (prospective acquisition and correction) 法を用いた呼吸同期 拡散強調画像を撮像し非呼吸同期拡散強調画像 と比較した.

次に、心時相について検討した.b 値を 50 s/ mm² に設定し、trigger delay を 100 ms ごとに 変化させて呼吸同期拡散強調画像を撮像した. なお、心筋の信号強度が最も高い心時相を至適 trigger delay と定義した.

さらに,b値について検討した.Trigger delay を拡張中期に設定し,b値を 50, 100, 200, 300, 600, および 800 s/mm² に変化させ て呼吸と心電図同期の拡散強調画像を撮像し た.

最後に,心室中隔の ADC を測定した. Trigger delay を拡張中期に,b 値を 200 と 300 s/mm² に設定し,呼吸と心電図同期の拡 散強調画像を撮像した.ワークステーション Syngo (シーメンス社製)上で ADC map を作 成し, Fig. 4 に示すように心内膜側と心外膜側 を除き,さらに右室接合部を除く心室中隔心筋 に関心領域を設定し ADC を測定した.

結 果

1. 呼吸同期について

非呼吸同期撮像では心筋の信号強度が弱く画 質が不良であったが、呼吸同期撮像により改善 した(Fig. 1). Single-shot echo-planar imaging 法を用いた本研究の撮像法では、呼吸同期 が不可欠であると考えられた.

なお、Edelman RR ら²は心電図同期の stimulated-echo echo-planar imaging (STE-EPI) 法を用いて心臓拡散強調画像が呼吸停止下で 20 秒以下で撮像できたと報告している.しか しながら、本研究の心電図同期 single-shot echo-planar imaging 法を用いた心臓拡散強調 画像は撮像時間が長いため、呼吸停止下で実施 することは困難であった.この撮像法を用いて 呼吸停止下で心臓拡散強調画像を取得するため にはパラメータの変更が必要であると考えられ た.

2. 心時相について

至適 Trigger delay はシネ画像で心臓が静止 していた心時相(拡張中期)に一致した. なお, Fig. 2 に示す症例では, RR 間隔が約 1,000 ms であったので, trigger delay を 20 ms から 900 ms にまで変化させて撮像した. 本例における 至適 trigger delay は 700 ms から 800 ms であ ると考えられた.

3. b 値について

b値が上昇するにつれて、心筋の信号強度は 他の臓器よりも早く減弱した(Fig. 3).b値が 600 s/mm²以上では心筋の信号強度が低く ADCの測定には適さないと考えられた.ADC mapの作製には、微小灌流の影響ができる限 り小さく、そして、良好な画像を安定して取得 することができるb値が200と300 s/mm²の 拡散強調画像を用いることにした.

4. ADC の測定

8 例で評価可能な拡散強調画像が取得でき

2006 年 11 月 27 日受理 2007 年 2 月 13 日改訂 別刷請求先 〒634-8522 奈良県橿原市四条町 840 奈良県立医科大学第 1 内科 岡山悟志 心筋拡散係数計測



Respiratory gating offRespiratory gating onFig. 1. The quality of the diffusion-weighted image (DWI) was improved using respiratory gating.



200

Trigger delay 20 (ms)

100

300

400



Fig. 2. DWI quality was affected by trigger delay ; for this case, the RR interval was approximately 1,000 ms. Optimal delay time was 700–800 ms.



Fig. 3. DWI quality was affected by the b-value. As the b-value increased from 50 to 800 s/mm², signal intensity of the myocardium decreased more rapidly than the signal of other organs.

た. 拡散強調画像が取得できた 8 例の心拍数 はすべて 70 回/分未満であり,取得できな かった 2 例は 70 回/分以上であった. 心室中 隔の ADC は 1.86±0.47×10⁻³ mm²/s であっ た (Table).

考 察

1. 心臓拡散強調画像の至適撮像条件

本研究から,我々は single-shot echo-planar imaging 法を用いた心臓拡散強調画像の至適撮 像条件を,①呼吸同期を用いること,②心臓が できる限り静止している心時相(拡張中期)で 撮像すること,③微小灌流の影響と心筋の信号 強度低下を考慮しながら,比較的低い b 値に 設定すること,④被験者の心拍数が70回/分 未満であることと提案する.

2. 心臓拡散強調画像におけるアーチファクト 評価可能な心臓拡散強調画像が取得できた8 例中5例で,左室自由壁,特に後側壁に,著

Table.	ADC for	IVS in	Ten Healthy	Volunteers
--------	---------	--------	-------------	------------

No.	sex	age	HR (/min)	$\begin{array}{c} ADC \ (mm^2/s) \\ for \ IVS \end{array}$
1	male	26	55	2.92
2	male	26	70	1.80
3	male	32	51	1.40
4	male	33	84	_
5	male	32	61	1.86
6	male	28	66	1.49
7	male	24	56	1.91
8	male	33	72	_
9	male	34	54	1.87
10	male	33	55	1.63
$mean\pm SD$		30 ± 3	62 ± 10	1.86 ± 0.47

ADC; apparent diffusion coefficients, HR; heart rate, IVS; interventricular septum.

明な壁厚の減少と信号強度の亢進が認められ た.シネ画像では同部位の壁厚と壁運動は正常 でありアーチファクトであると考えられた



Fig. 4. An apparent diffusion coefficient (ADC) map was constructed using b-values of 200 and 300 s/mm². ADC is calculated for the interventricular septum.

(Fig. 5). Edelman RR らは, stimulated-echo echo-planar imaging 法を用いた心臓拡散強調 画像で, 左室自由壁, 特に後側壁に信号強度低 下のアーチファクトが認められることを報告し ている²⁾.報告によると, このアーチファクト は心筋ストレインが不均一な心時相で撮像する ことに起因するとされる.本研究で認められた アーチファクトは, Edelman RR らが報告し たアーチファクトと, 性状は異なるが, 発生原 因は同じである可能性があり, 今後, 至適 trigger delay の設定方法を再考する必要があると 考えられた.

3. 健常例における心室中隔の ADC の測定

ADC map の作製には微小灌流の影響ができ る限り小さく、そして、良好な画像を安定して 取得することができる b 値が 200 と 300 s/ mm² の拡散強調画像を用いた. 呼吸と心電図 同期の single-shot echo-planar imaging 法を用 いた本研究では心室中隔の ADC(×10⁻³ mm²/ s) が 1.86 ± 0.47 であったが、呼吸停止下の心 電図同期 stimulated-echo echo-planar imaging 法を用いた Edelman RR らの報告²⁾では 0.92



Fig. 5. Artifact apparent in a cardiac diffusionweighted image (DWI). An area of remarkably high signal intensity and thinning is seen in the posterolateral wall on the DWI (arrow); cine images confirmed the absence of any abnormality.

 ± 0.15 であった.なお,Edelman RR らの報 告では b 値を 2 から 456 s/mm² までの範囲内 で変化させ,主に収縮中期の拡散強調画像を用 いて ADC map を作製している.本研究におけ る心室中隔の ADC が Edelman RR らの報告に 比して高値であった理由として,①呼吸と心 電図同期の single-shot echo-planar imaging 法 は,呼吸停止下の心電図同期 stimulated-echo echo-planar imaging 法に比して,心臓の動き の影響を十分に排除できず ADC の計測精度が 低いこと,②本研究の b 値が低いこと,③撮 像した心時相が異なることなどが考えられる.

4. 低い b 値の拡散強調画像

本研究により、呼吸と心電図同期の singleshot echo-planar imaging 法を用いた心臓拡散 強調画像は、b 値が低い条件での撮像に限られ ることが明らかになった.低いb 値の拡散強 調画像は、微小灌流と T_2 コントラストの影響 を強く受け本来の拡散コントラストのみから構 成される画像ではないため、ADC の計測精度 が十分ではない.しかしながら、背景信号や血 流信号が抑制されるため通常の T₂強調画像に 比してコントラスト分解能が高いとされる⁹⁾.

心臓領域における低い b 値の拡散強調画像 の有用性は不明である. 今後は,低い b 値の 心臓拡散強調画像を T₂強調画像と比較しなが ら検討していくことが重要であると考えられる.

結 語

Single-shot echo-planar imaging 法を用いた 心臓拡散強調画像を撮像し,健常例における心 室中隔の ADC を測定した.現在,心臓拡散強 調画像は,その撮像方法や評価方法に様々な問 題点があるものの,他の撮像法や他のモダリ ティーでは得られない有益な情報を与えること から,今後,重要な撮像法になると考えられる.

文 献

- 1) 井藤隆太:拡散強調画像の使い方とその臨床的意 義.日磁医誌 2006;26:79-97
- Edelman RR, Gaa J, Wedeen VJ, Loh E, Hare JM, Prasad P, Li W : *In vivo* measurement of water diffusion in the human heart. Magn Reson Med 1994; 32: 423–428

- Reese TG, Weisskoff RM, Smith RN, Rosen BR, Dinsmore RE, Wedeen VJ : Imaging myocardial fiber architecture *in vivo* with magnetic resonance. Magn Reson Med 1995; 34: 786–791
- Reese TG, Wedeen VJ, Weisskoff RM: Measuring diffusion in the presence of material strain. J Magn Reson B 1996; 112: 253–258
- Tseng WY, Reese TG, Weisskoff RM, Wedeen VJ: Cardiac diffusion tensor MRI *in vivo* without strain correction. Magn Reson Med 1999; 42: 393-403
- Tseng WY, Reese TG, Weisskoff RM, Brady TJ, Wedeen VJ: Myocardial fiber shortening in humans: initial results of MR imaging. Radiology 2000; 216: 128–139
- 7) Tseng WY, Wedeen VJ, Reese TG, Smith RN, Halpern EF: Diffusion tensor MRI of myocardial fibers and sheets: correspondence with visible cut-face texture. J Magn Reson Imaging 2003; 17:31-42
- 8) Wu MT, Tseng WY, Su MY, Liu CP, Chiou KR, Wedeen VJ, Reese TG, Yang CF : Diffusion tensor magnetic resonance imaging mapping the fiber architecture remodeling in human myocardium after infarction : correlation with viability and wall motion. Circulation 2006 ; 114 : 1036–1045
- 9)原留弘樹,小林邦典,似鳥俊明:上腹部への臨床応用.画像診断 2005;25:712-722

Measurement of Apparent Diffusion Coefficient of Myocardium Using Echo-planar Imaging

Satoshi OKAYAMA¹, Hiroki TOMAYA³, Masahiro MINAMI³, Katsuyoshi SHIMA³, Kenji ONOUE¹, Yasuhiro TAKEMOTO¹, Sawako OMORI², Hajime IWAMA², Hiroki URAMOTO², Yoshiyuki KOBAYASHI², Makoto WATANABE², Shiro NAKANISHI³, Yasushi KUBOTA³, Shiro UEMURA¹, Yoshihiko SAITO¹

¹The First Department of Internal Medicine, Nara Medical University Shijo-cho 840, Kashihara, Nara 634–8522 Departments of ²Radiology and ³Cardiology, Hirai Hospital

Background : Diffusion-weighted imaging (DWI) has been proven useful in displaying water diffusion in various tissues, and DWI is a promising method for tissue characterization. However, DWI of the myocardium is difficult because of cardiac and respiratory motion artifacts. Objectives : This study was conducted to establish a technique for cardiac DWI (cDWI) to determine the value of the apparent diffusion coefficient (ADC) in the normal human heart. Methods : cDWI was performed in 10 healthy volunteers using a diffusion-weighted echo-planar sequence with 3 orthogonal motion-probing gradient pulses. Images were acquired in the diastolic phase to minimize cardiac motion. ADC was calculated for the interventricular septum using b-values of 200 and 300 s/mm². Results : cDWI was satisfactory in 8 volunteers without tachycardia (heart rate <70/min). In 5 volunteers, cDWI demonstrated areas of remarkable high signal intensity and thinning in the posterolateral wall. These were identified as artifact, and cine images confirmed the absence of abnormality. Mean ADC (mm²/s) was 1.86 ± 0.47 in the interventricular septum. Conclusions : cDWI appears to be a novel and useful modality for the characterization of cardiac tissue.